

自他交替動詞を含む英語構文の中間言語の分析

Analysis of JLE's Interlanguage Grammar for the Alternating-Verb Structures

稲葉 えいり

Eiri Inaba

愛知県立大学国際言語文化研究科

Graduate School of International Cultural Studies, Aichi Prefectural University

eiina641_astro@yahoo.co.jp

概要

本研究では、非対格動詞（自他交替有り）の習得について、他動詞文、自動詞文、過剰受動文の容認・否認の観点から学習者の形成する中間言語規則を類型化して分析した。その結果、主に5つの類型が見られた。英語熟達度が上がっても変化せず、化石化の可能性のある類型も見られた。中間言語規則は、目標言語規則に向かってまっすぐに再構築されるとは限らないことも示唆された。長期観察等による研究が課題となった。

キーワード：中間言語、非対格動詞、過剰受動化、(interlanguage, unaccusative verb, overpassivization)

1. 研究の目的と背景

本研究は、非対格動詞 (Perlmutter, 1978) を含む英語の構文の習得研究である。非対格動詞 (unaccusative verb) には、自動詞用法だけの動詞 (occur, happen, exist 等)、自他交替し、他動詞用法、自動詞用法の二つがある動詞 (open, close, role 等) の2種類があり、英語学習者には習得しにくいものの一つと考えられている (Oshita, 2000; Yamakawa, 2008 等)。特に、これらの動詞の自動詞用法を否認し、過剰受動文を容認する誤用は、日本人学習者 (Kondo, 2005; 佐藤, 2015 等) だけでなく、中国語 (Ju, 2000)、韓国語 (Shin, 2011)、その他の言語 (Montrul, 2000) を母語とする英語学習者にも見られることが報告されている。

非対格動詞を用いた構文における誤りは、学習者の形成している中間言語規則に基づいて起こるものだと考えられる。中間言語とは、Selinker (1972) が提唱した概念で、人間は脳内には潜在的な言語体系が存在し、第二言語学習者が目標言語を習得していく過程でその言語体系を参照しながら目標言語とも学習者の母語とも異なる独自の言語体系を構築するという仮説である。中間言語は第二言語習得が進展するにつれて変化し、次第に目標言語の体系に近づいていくと考えられている。中間言語の形成の過程では第一言語転移、第二言語規則過剰般化、化石化や停滞化等が起こることが知ら

れている。

本研究では、自他交替のある非対格動詞を用いた構文について、日本人大学生がどのような中間言語規則を形成しているかを明らかにする。他動詞文 (NP+V+NP)、自動詞文 (NP+V)、過剰受動文 (*NP+be+Ven) の3つの構文について、文法性判断タスクを用いて調査を行い、これらの3種類の構文の容認・否認の組合せを類型化し、学習者の中間言語規則がどのようなものかを探る。具体的には、以下の点を研究課題とする。

- (1) 学習者は非対格動詞について、どのような種類の中間言語規則を形成しているか。
- (2) 英語の習熟度別の中間言語規則の特徴は何か。
- (3) 中間言語規則は、英語の熟達とともにどのように変化していくか。

2. 先行研究と研究の意義

これまで、非対格動詞の習得については、非対格動詞を用いた構文 (他動詞文・自動詞文・過剰受動文) の誤用の種類に関する研究、これらの構文の習得難易度に関する研究、誤用の要因に関する研究、習得の道筋に関する研究等が行われてきた。これらの研究では、言語コーパス、文法性判断タスク、選択式のテスト、文の産出タスク等を用いて収集したデータが研究目的に合わせて用いられ、その多くは、非対格動詞の他動詞文・自動詞文・過剰受動文の正答率、正答数、平均値等を別々に集計して、習得難易度や習得順序等を比較している。

筆者の先行研究 (稲葉, 2019) においても、自他交替のある非対格動詞を含む他動詞文、自動詞文、過剰受動文について、文法性判断タスクを用いて日本人大学生に調査し、用法別 (他動詞用法、自動詞用法) の難易度、英語の熟達度との関わり、動詞による難易度の違い等について考察している。結果、全体として自動詞文を正しくないと判断する傾向、過剰受動文を正しいと判断する傾向が見られることを提示したが、総体として学

習者のもつ中間言語体系の提示には至っていない。

そこで、本研究では、上述の研究をさらに進め、学習者が中間言語にどのような文法概念や規則を有しているかを追究する。ここでは、各学習者が非対格動詞を用いた3つの構文(他動詞文・自動詞文・過剰受動文)をどのように捉えているかに着目し、文法性判断タスクの回答(容認・否認)の組合せを類型化して分析することにより、学習者がどのような中間言語規則を形成しているかを明らかにする。そして、英語の熟達度との関わりから特徴や変化を考察することで、非対格動詞(自他交替無し)の習得に関する新たな知見を得ることをめざしている。

3. 研究の方法

3.1 研究参加者

研究参加者(以下、参加者)は、日本の大学の学部1~4年生の日本人学生104人である。TOEIC試験の得点で下位群(平均点381点)45人、中位群(平均点523点)44人、上位群(725点)15人にグループ分けした。表1は3グループのTOEICの点の記述統計量である。

これらの3グループ間のTOEICの点に統計的有意差が見られるかどうかを調べるために、一元配置分散分析により等分散性の検定を行った。その結果、自由度2、 F 値147.284、 p 値<.001で、3グループ間には1%水準で有意差が見られた。よって、3グループは熟達度が異なると判定した。

表1 参加者のTOEICスコアの記述統計量

グループ	n	Max.	Min.	M	SD
下位群	45	525	195	381	65
中位群	44	650	300	522	75
上位群	15	860	655	725	62
合計	104	860	195	490	135

3.2 調査

文法性判断タスクでは、自他交替のある非対格動詞を用いた以下の(A)(B)(C)に例示した3つの構文の正否が正しく判断できるかどうかを調査した。(A)は自他交替のある動詞‘close’の他動詞用法の自動詞文で、正しい文(以下、「正文」)である。(B)は自動詞用法

の能動文(自動詞文)で、正文である。(C)は自動詞用法の受動文で、過剰受動化されている(以下、「過剰受動文」)ので、誤った文(以下、「非文」)である。

(A) John closed the door. [NP+V+NP]

(他動詞用法・正文/他動詞文)

(B) The door closed immediately. [NP+V]

(自動詞用法・正文/自動詞文)

(C) *The door was closed automatically.

[NP+be+Ven]

(自動詞用法の受動文・非文/過剰受動文)

ここでは、10個の非対格動詞(‘close’‘roll’‘break’‘dry’‘change’‘drop’‘decrease’‘melt’‘start’‘grow’)を用いた他動詞文、自動詞文、過剰受動文、合計30文について調査した。動詞は、Perlmutter(1978)の非対格動詞、非能格動詞の分類に沿って選んだ。また、先行研究(Zobl, 1989他)の中で産出された誤用例として取りあげられたもの、先行研究で扱われたもの(Kondo, 2005; Yamakawa, 2008; Sato, 2013他)で、一般に日本の大学入学までに学習する語彙と考えられるものを選んだ。

文法性判断タスクは、「1. 正しいと思う」、「2. 正しくないと思う」、「3. 分からない」の3択から1つ選択する形式で回答を求めた。複数の英語母語話者に調査文のネイティブ・チェックをしてもらい、全員の回答が一致することを確認した。調査文は、全て平易な語彙から成る1文である。調査には、本調査以外の文も含まれており、それらと混ぜて不規則な順序で配列した。

3.3 中間言語規則の類型

中間言語規則の分析は、(A)(B)(C)タイプの文を3種類1組にし、容認(「正しいと思う」)・否認(「正しくないと思う」)の組合せ(K)により、以下のK1~K8の8種類、5類型(K1~K5-8)に分類した。そして、参加者ひとり一人が提示された3つの構文についてどの類型で回答したかを分析した。()内は、他動詞文(A)・自動詞文(B)・過剰受動文(C)の回答の組合せを示す。K5-8は他動詞文の否認を含む組合せを一つにまとめた。そして、それぞれの組合せから想定される中間言語規則(ILG/Interlanguage Grammar)の類型に仮称を付けた。以下の中間言語規則の類型で非文には、*印を付した。

- K1 目標言語規則型 (A 容認・B 容認・C 否認)
 K2 過剰受動文容認型 (A 容認・B 容認・C*容認)
 K3 自動詞文・受動文混乱型
 (A 容認・B*否認・C*容認)
 K4 自動詞文否認型 (A 容認・B*否認・C 否認)
 K5-K8 他動詞文否認型
 K5 : A 否認/B 容認/C 否認
 K6 : A 否認/B 容認/C*容認
 K7 : A 否認/B*否認/C 否認
 K8 : A 否認/B*否認/C*容認

K1 は目標言語の正しい文法規則である。K2 は過剰受動文 (C) を容認する中間言語規則である。K3 は自動詞文 (B) を否認し、過剰受動文 (C) を容認するので、自動詞文と過剰受動文が混乱している中間言語規則である。K4 は自動詞文 (B) を否認する中間言語規則である。

K5~K8 は、他動詞文を否認するその他の組合せである。基本的と考えられる他動詞文を否認していることから、中間言語にはまだ規則が形成されていない状態、不安定な状態等、混沌としている状態と考えられる。

4. 結果と考察

4.1 中間言語規則の分布 (研究課題 1)

まず、研究課題 1 の学習者は非対格動詞について、どのような類型の中間言語規則を形成しているかを検討する。表 2 は、K1~K8 の類型の記述統計量を示している。Sum は各類型 (K) の合計数、Mean は平均値を表している。

分布を見ると、K1~K8 まで、全ての類型が見られる。中でも、K1~K4 の合計 (平均値) が高く、この 4 類型が全体の約 75% を占める。K5~K8 はそれぞれの割合が低い、合計すると約 25% を占める。よって、参加者の主な中間言語規則として、K1~K4 の 4 類型があげられることが分かった。また、K5~K8 に見られるような、中間言語規則形成の前段階にある参加者がいることも明らかになった。この結果から、参加者は非対格動詞 (自他交替有り) について、いくつかの異なる中間言語の体系に基づいて文法性判断をしていることが分かった。これは、3 つの構文の難易度 (正答率等) を別々に集計しては、見えていなかった側面である。

表 2 K1~K8 の類型の記述統計量

ILG	N	Min	Max.	Sum	Mean	SD
K1	104	0	7	240	2.31	1.885
K2	104	0	10	249	2.39	1.882
K3	104	0	8	194	1.87	1.625
K4	104	0	5	105	1.01	1.038
K5	104	0	4	80	0.77	0.927
K6	104	0	3	77	0.74	0.836
K7	104	0	4	40	0.38	0.741
K8	104	0	4	55	0.53	0.812
K5-8	104	0	8	252	2.42	1.772

4.2 熟達度別の特徴 (研究課題 2)

次に、研究課題 2 の英語習熟度別 (下位群・中位群・上位群) の中間言語規則の特徴を考察する。

はじめに下位群の中間言語規則の類型の分布を見る。図 1 は、下位群の K1~K8 の類型の割合を示している。一番多いのは、K2 の 24.0% である。次に K1 と K3 の 18.0% である。K4 以下の類型は 10% 以下である。

よって、下位群では、過剰受動文容認型の中間言語規則を形成している参加者が多いことが分かった。また、自動詞文・受動文混乱型も見られ、正しい文法規則 (目標言語規則型) を構築している割合は低いと言える。

また、他動詞文否認型の割合の合計は、約 30% を占め、中間言語規則が混沌としている参加者も多く存在することが明らかになった。他動詞文は、習得が比較的困難ではないと言われているが、下位群では、誤って理解している学習者もいることが分かる。

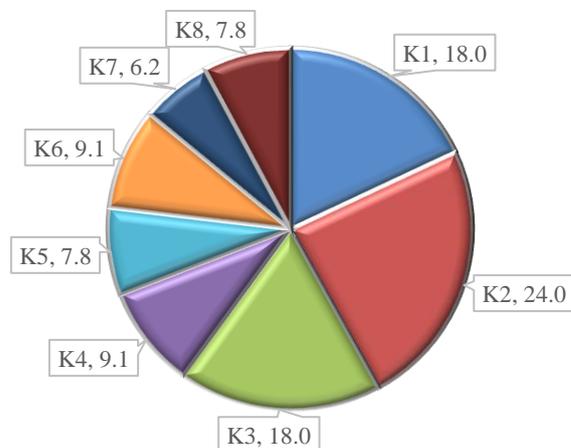


図 1. 下位群の K1-K8 の類型の割合の分布

次に、中位群の特徴を見る。図2は、中位群におけるK1～K8の種類の割合の分布である。K2が27.0%で、最大である。次に、K1が24.3%である。続いて、K3が18.0%、K4が10.0%である。残りのK5～K8の種類はそれぞれ10%以下である。

よって、目標言語規則型の割合は増加し、正しい文法規則を形成できるようになってきていることが分かる。しかし、過剰受動文容認型の割合、及び、自動詞文・受動文混乱型の割合は、下位群と比較してもあまり変化してない。したがって、この熟達度で留まっている中間言語規則であると考えられる。K4についても、再構築されにくい中間言語規則の可能性はある。

一方、他動詞文否認型の割合の合計は約20%に減少し、次第に何らかの中間言語規則が形成されてきたことが示唆される。

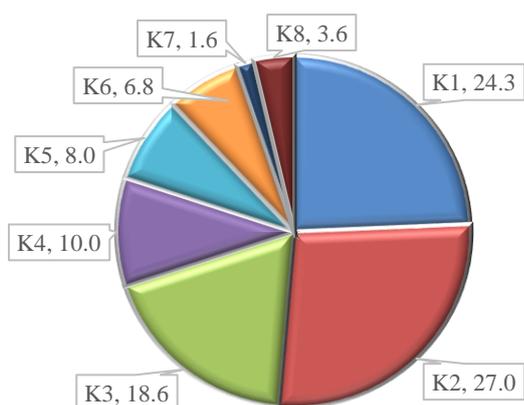


図2. 中位群のK1-K8の種類の割合の分布

続いて、上位群における中間言語規則の種類の分布を見る。図3は、上位群におけるK1～K8の種類の割合を示している。K1が34.7%で、最大である。次にK3が20.7%で、K2の割合は18.0%と少なくなっている。K4は13.3%であるが、残りのK5～K8の種類はK5を除いて5%以下である。

よって、上位群においては、目標言語規則型の割合は増加し、正しい文法規則を形成できていることが分かる。一方、自動詞文・受動文混乱型が一番多いのが特徴である。自動詞否定型は増加し、過剰受動文容認型と同じぐらいの割合で見られる。他動詞文否認型の合計の割合は少なく、中間言語規則の形成がさらに進んだと考えられる。

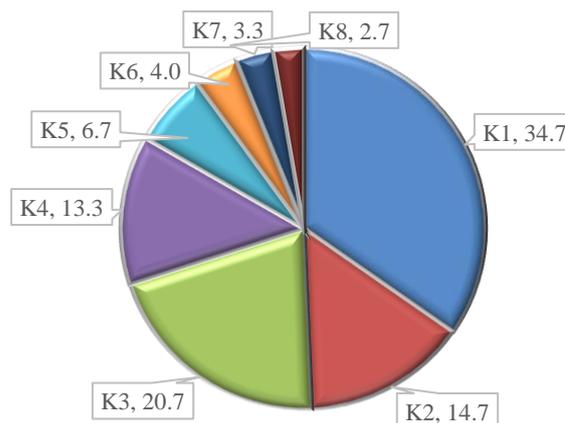


図3. 上位群のK1-K8の種類の割合の分布

4. 3 中間言語規則の変化（研究課題3）

研究課題3の学習者の中間言語規則は、英語の熟達とともにどのように変化していくかについて考察する。ここでは、K1～K5-8の種類の平均値が下位群から上位群にかけてどのように変化するかを検討する。図4は、K1～K5-8の平均値の推移を示している。表4は、クラスカル・ワリス検定によるグループ間の平均値の差の検定結果の一覧である。

K1の平均値は、下位群で1.80、上位群で3.47で、統計的に有意な増加が見られた。よって、熟達度が上がるとともに目標言語規則の習得が進むと言える。K2は、下位群で2.40、上位群で1.47に減少しているが、統計的に有意差には至らなかった。

K3は、下位群で1.80であるが、上位群でもあまり変動が見られない。統計的な有意差もない。K4についても、下位群で0.91、上位群で1.33であるが、統計的に有意差は見られなかった。よって、これらは、熟達度が上がってもそのまま保持されている中間言語規則であると言える。

一方、K5-8は、下位群では3.09であるが、上位群では1.67で、統計的に有意な減少が認められた。よって、混沌状態から、中間言語の文法体系が形成されていくことが示唆された。その体系が目標言語規則なのか、その他の中間言語規則の種類の一つなのかは、今回の調査からは特定できないので、この点を明らかにするには、更なる調査分析が必要であると考えられる。

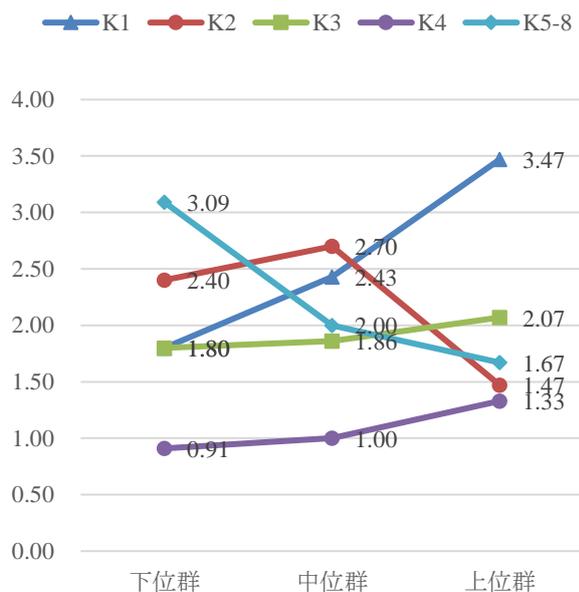


図 4. K1~K5-8 の類型の平均値の推移

表 4 クラスカル・ワリス検定の結果

	K1	K2	K3	K4	K5-8
Kruskal-Wallis H	7.199	4.723	0.281	1.664	9.723
df	2	2	2	2	2
Asymp. Sig.	.027*	.094	.869	.435	.008**

両側検定, * $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

5. まとめとディスカッション

本研究では、非対格動詞（自他交替有り）の習得について、非対格動詞（自他交替有り）の他動詞文、自動詞文、過剰受動文の容認・否認の組合せから、8種類5類型の中間言語規則を想定して、その分布の割合を考察し、以下の結果を得た。

学習者（参加者）の中間言語規則には、主に目標言語規則型、過剰受動文容認型、自動詞文・受動文混乱型、自動詞文否認型の4類型が見られた。よって、目標言語規則型を除くこれらの3類型は、非対格動詞に関する典型的な中間言語規則であることが示唆された。

他動詞文の否認を含む4種類の文（他動詞否認型）は、それぞれの割合は少なかったが、合計すると約2割を占めた。先行研究（Oshita, 2000; Yamakawa, 2008 他）では、他動詞文を容認することは、比較的容易であると考えられてきたが、他動詞文の否認を含む中間言語規則が見られることが典型的な中間言語規則の一つであることも明らかになった。

中間言語規則の分布を英語熟達度との関わり観点から分析した結果、目標言語規則は、熟達度が上がると習得が進むことが分かった。過剰受動文容認型、自動詞文・受動文混乱型、自動詞文否認型に関しては、統計的に有意な変化は見られないこと、上位群でも一定の割合で見られることから、化石化や停滞しやすい中間言語規則であることが示唆された。

他動詞文否認型は熟達度が上がると、統計的に有意な減少が見られ、次第に、混沌状態から抜けて、何らかの中間言語の文法体系が形成されていく可能性が示唆された。それは、必ずしも目標言語の文法になるとは限らない。中間言語の文法を経て、目標言語の文法規則を構築することもある。本調査の結果からだけでは、その過程を検証することはできないので、長期観察等によるさらなる考察が必要である。

目標言語規則型の割合は、上位群でも約35%で、習得が容易でないとと言える。過剰受動文容認型は、習熟度の下位群、中位群に多く見られた。自動詞文・受動文混乱型は、下位群から上位群までほぼ20%の割合を占めた。

過剰受動文容認型、自動詞文否認型、自動詞文・受動文混乱型の3類型の合計は、どの習熟度レベルにおいても中間言語規則の約半分を占める。よって、誤った中間言語規則を正しく再構築するのは容易ではなく、学習者の中間言語の中に停滞する可能性が提示された。

6. 結論と今後の課題

本研究では、非対格動詞（自他交替有り）の習得について、他動詞文、自動詞文、過剰受動文の容認・否認の観点から学習者の形成する中間言語規則を類型化して分析した。その結果、非対格動詞の自他交替用法の完全な習得（3つの構文に正しく理解すること）は、日本語を母語とする大学生には、それほど容易ではないことが明らかになった。その習得の過程では、いくつかの中間言語の類型が見られ、学習者が非対格動詞について形成している中間言語は必ずしも一種類ではないことも分かった。そして、中間言語規則は、英語の熟達と共に変化する場合もあれば、化石化する場合もあることが示唆された。変化がまっすぐに目標言語規則に向かうかどうかは、本調査だけでは明らかにすることはできず、長期観察による研究等が課題となった。以上の結果は、今回調査した研究参加者、及び、その英語熟達度の範囲についてのみ言えることなので、今後はより研究対象を広げていく必要がある。

資料

文法性判断タスクの調査文

(A) 他動詞文

- (1a) He closed the door.
- (2a) He rolled the ball.
- (3a) He broke the wineglass.
- (4a) He dried the shirt outside.
- (5a) He changed his address.
- (6a) He dropped his cell phone.
- (7a) He decreased the speed of the car.
- (8a) The sun melted the snow.
- (9a) He started the meeting.
- (10a) She grows tomatoes.

(B) 自動詞文

- (1a) He closed the door.
- (2a) He rolled the ball.
- (3a) He broke the wineglass.
- (4a) He dried the shirt outside.
- (5a) He changed his address.
- (6a) He dropped his cell phone.
- (7a) He decreased the speed of the car.
- (8a) The sun melted the snow.
- (9a) He started the meeting.
- (10a) She grows tomatoes.

(C) 過剰受動文

- (1c) *The flower is closed around the sunset.
- (2c) *The ball was rolled quickly down the hill.
- (3c) *The old chair was broken year by year.
- (4c) *The shirt was dried fast with a breeze.
- (5c) *The weather in London is often changed.
- (6c) *The temperature was dropped.
- (7c) *The population was decreased in Japan.
- (8c) *The snow in the mountain is melted in March.
- (9c) *The school was started yesterday.
- (10c) *Tropical trees are grown fast in Indonesia.

参考文献

- [1] Balcom, P. (1997). Why is this happened? Passive morphology and unaccusativity. *Second Language Research*, 13(1), 1-9.
- [2] Ju, M. -K. (2000). Overpassivization errors by second language learners: The effect of conceptualizable agents in discourse.

- Studies in Second Language Acquisition* 22, 85-111.
- [3] 稲葉えいり (2020) . 「英語の過剰受動文の文法性判断の分析—熟達度の観点から—」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』21, 愛知県立大学大学院国際文化研究科, pp. 1-19.
- [4] Kondo, T. (2005). Overpassivization in second language acquisition. *IRAL (International Review of Applied Linguistics)*, 43, 129-161.
- [5] Montrul, S. (2000). Transitivity alternations in L2 acquisition: Toward a modular view of transfer. *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 229-273.
- [6] Oshita, H. (2000). What is happened may not be what appears to be happening: A corpus study of 'passive' unaccusatives in L2 English. *Second Language Research*, 16(4), 293-324.
- [7] Perlmutter, D. M. (1978). Impersonal passives and the unaccusative hypothesis. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 4, 157-189.
- [8] 佐藤恭子 (2015) . 『非対格動詞の受動化はなぜ起こるのか—*An accident was happened, をめぐって』 溪水社.
- [9] Selinker, L. (1972). Interlanguage. *IRAL (International Review of Applied Linguistics)* 10, 209-231.
- [10] Shin, J.-A. (2011). Overpassivization errors in Korean college students' English writings. *Korean Journal of Applied Linguistics* 27(3), 255-273.
- [11] Yamakawa, K. (1994). Error analysis of a passive sentences written by Japanese learners of English : With reference to native language transfer. *ARELE (Annual Review of English Language Education in Japan)* 5, 101-110.
- [12] 山川健一 (2008) 『英語の非対格動詞の第二言語習得』 安田女子大学言語文化研究所.
- [13] Zobl, H. (1989). Canonical typological structures and ergativity in English L2 acquisition. In Gass, S. M. & Shachter, J. *Linguistic perspectives on second language acquisition*. New York: Cambridge University Press (pp. 203-221).